

緩和ケアと緑の薬草酒の関係

The relationship of palliative care and the green medical herb liquor

むつ総合病院 緩和ケアチーム 山田恭吾

この度は、緩和ケア概論という内容での執筆を依頼されましたので、なぜ私が医学や外科、緩和へ進んだのかというお披露目とともに、緩和と酒について、話を進めてみようと思います。

まずは、私が医師を目指したこと、外科医を目指したこと～これは必然～だったと思われます。地方商人の家に生まれた私ですが、生後40日で重症肺炎を発症し、生死をさまよったそうです。小学3年では穿孔性虫垂炎・腹膜炎、翌年には腸閉塞、さらには腹壁癒痕ヘルニアと、お腹にはもう切るところがないほど切開創だらけです。入院中には、連載が開始されたばかりのブラックジャックを読み漁っていました。当時の主治医・松代隆先生が弘前大学の第2外科出身であることから、同大医学部に入ることを目指し、見事に一浪を経験しました。入学直後には、当時講師でいらっしゃった、前第2外科教授・佐々木睦男先生を紹介していただいていたので、そのお部屋を訪問し、入学と同時に入局を決めていました。

さて、外科医として10年研鑽を積んだ後、平成17年4月よりむつ総合病院外科で勤務が始まりました。それに先駆けること9年、緩和ケアの重要性が唱えられており、平成8年に日本緩和医療学会が発足し、緩和医療の充実に向けた研究と実践を目ざして活動し、普及啓発にも取り組んでいます。がん診療連携拠点病院を中心に研修会が開催され、当院でも平成20年度から毎年実践しています。

緩和ケアとは、かつては治療による回復が望めなくなった終末期にあるがん患者さんや、その御家族が対象でした。しかし近年では、治療初期の段階からかわり、がん告知時点でのインフォームド・コンセントや、治療・延命処置中も含めて、身体的苦痛や心理的・精神的苦痛、社会的問題に積極的に対処する包括的アプローチに変化しています。

歴史的には、キリスト教的人道主義に根ざしたホスピスケアの考え方を受け継ぎ、1970年代にカナダで提唱されたとされています。末期がん患者さんなどが最後まで尊厳をもって安楽に充実し

た自分らしい人生を送れるよう援助するもので、クオリティ・オブ・ライフの重視という考えに根ざしています。緩和ケアは医師・看護師だけでなく、宗教家も含め心理・社会学などの専門家と栄養士、マッサージ師ら必要と思われる職業すべてで構成されるチームで始まりました。WHOでは、がんの痛みに対する包括的な医療の重要性を強調し、病気の早い段階からのアプローチを提唱しています。

現代緩和ケアの礎は、シシリー・ソンドース（英：1918～2005）（Fig. 1）といわれています。彼女は、看護師→医療福祉士→医師という経歴の持ち主です。ホスピス運動の誕生に当たって重要な役割を果たし、また近代医学における緩和医療の重要性を強く強調したことで知られています。48歳の時、自ら聖クリストファー病院にホスピス病棟を開設、以来、ここで働いてきました。1950年代までの医療は、モルヒネなどの鎮痛剤を、中毒になりやすく危険であることを理由に、がんの末期患者に対して使うことを控える傾向にありましたが、ソンドースはそのようなやり方を改め、患者の肉体的な苦痛を改め、精神的・心理的な苦痛を緩和し、安らかに余生を送ってもらえるような緩和ケアを実践しました。このような医療は全人的医療と呼ばれています。



Fig.1 シシリー・ソンドース氏

さて私は、院内でも知られた？酒好きで、いわゆる【ほんずなし】状態に陥ることが少なくないようです。緩和ケアとお酒とは、どこかでつながるものと私は思っております。

時は中世 1600 年代、場所はヨーロッパです。十字軍の遠征で傷ついた兵士、旅している巡礼者が病に冒されたとき、小さな教会に付属した宿泊施設で治療をしたそうです。そのうちの一つに、フランスのシャルトリューズ山地にあるカルトジオ会の修道院 (Fig. 2) があります。山中の森深い奥地にある同修道院は、敬虔な信者達が巡礼をするにも困難で、冬の季節には多くの遭難者も出していたと言われていました。この修道院では、フランス語で、緑の意味を持つハーブ系リキュール (Fig. 3) が作られていました。元々は不老不死の霊薬と信じられていたようですが、修道院によりやく辿り着いた巡礼者たちをねぎらい、或いは気付け薬として使われていたようです。角砂糖にこの薬草酒を垂ら

して (Fig. 4) 与えることで、体温の上昇、糖分の摂取、血巡りを改善し、胃腸機能を整えたと言われています。さらに神秘的なのは、この 130 種類もハーブが使われている薬草酒、原型の誕生からすでに 400 年以上も経過しているのに、詳細なレシピは 3 人の修道士と、委託された業者しか知らないということです。

もう一つ、お酒にまつわる話としては、Suze というリキュール (Fig. 5) を取り上げなければなりません。このお酒は、リンドウという花 (Fig. 6) の根から造られるお酒です。リンドウの花言葉は、【君の悲しみに寄り添う】です。悲しみは魂で感じます。お酒＝スピリッツ＝魂ともいわれています。Suze は魂を救済するお酒と言っても過言ではないでしょう。私は今宵も、緩和ケアの実践のため、Chartreuse と Suze を求めて、むつの町中へ、悩める魂に寄り添いに出かけ続けるのでしよう。



Fig. 2 カルトジオ会修道院



Fig. 3 ハーブ系リキュール



Fig. 4 角砂糖に薬草酒を垂らしたところ



Fig. 5 Suze

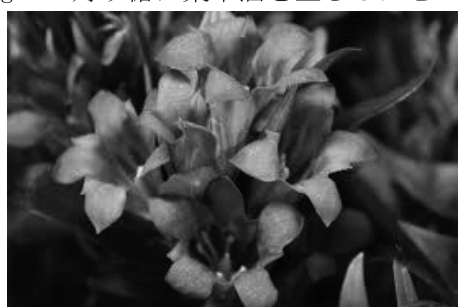


Fig. 6 リンドウ